

# 環境リスク学

中西 準子・著



《評者》吉田 光宏

(ジャーナリスト)

日本評論社＝(03)3987)8621、  
四六判、251頁、1890円。

スマトラ沖地震の津波のような  
天災、病気など種々雑多のリスク  
の中で生きていくわれわれは、メ  
ディアや研究者が「オオカミが来  
るぞ」と騒げば、不安をかき立て  
られてしまう。だが著者はそんな  
研究者ではない。冷静にファクト  
(事実)を検証し、「どれだけ危な  
いか」を示す物差しを用意して  
くれた。

日米で大きな問題となっている  
牛海綿状脳症(BSE)は、米國  
が全頭検査で0・01人弱の命を  
救うのに2000億円かかる。米  
國も日本も理論的には全頭検査は  
必要ない、という。リスクの大き  
さを明らかにし、対策を提示する  
のが行政の責任だとする。

ダイオキシンも空騒ぎだった。  
旧厚生省が「85%は生活系のごみ  
焼却場から排出されている」と発  
表したが、著者は水田除草剤C  
NP(クロロニトロフェン)に含  
まれていた有害なダイオキシン成

## 事実から合理的「危うさ」見抜く

分が主因であることを突き止め  
た。  
環境ホルモンや貧困のリスクな  
ど、さまざまなリスクも取り上げ  
ている。

明快な理論と事実の裏付けによ  
って到達した「環境リスク学」。  
自分たちの立場に固執して責任あ  
る対応をしない消費者運動、研究  
者や行政をばっさり切り捨てる。  
尻馬に乗るメディアも反省すべ  
し。

著者がこれまで闘ってきたの  
は、科学を身勝手に操ろうとする  
「人間に潜むリスク」かもしれない。

版を重ねている本書には、批判  
や疑問も多く寄せられるようだ。  
著者は自身のホームページで補足  
説明するなど、真摯(しんしん)な  
研究者の態度を貫く。本書を讀ま  
ずに環境問題という「不安の海」  
を泳ごうとすれば、リスクは非常  
に大きいといえる。